

2019 年度後期大学入門ゼミ 報告書

奈良フィールドワーク

新しい奈良みつけた



写真：東大寺二月堂にて。撮影：渡辺和之。

阪南大学国際観光学部

渡辺ゼミ

Kazuyuki Watanabe (ed.) 2020 *Nara Fieldwork: We found new image of Nara*. Students' Fieldwork Reports of 2019. Osaka: Faculty of International Tourism, Hannan University.

Address

1-108-1, Amami-Minami, Matsubara, Osaka, 580-0033, Japan.

E-mail watanabe@hannan-u.ac.jp

URL <https://www.hannan-u.ac.jp/doctor/tourism/watanabe/mrrf4300000285rc.html>

ご挨拶

国際観光学部教員 渡辺和之

大学入門ゼミの後期フィールドワーク報告書が完成した。今期は、SA(Student Assistant)の2人が活躍してくれた。なかなか候補地が決まらないなかで、司会をしたり、調べごとをする割り振りを決めることをやってくれた。ゼミというのは、あまり教員が前に出過ぎないのがよいとわかった。教員に言われると、面倒くさいと思う学生が、SAには迷惑はかけられないと、自主的に動き出すのである。

今回は、報告書の「はじめに」と「おわりに」をSAが書いてくれた。2人は昨年の大学入門ゼミで渡辺ゼミの学生だったので、こちらのやり方はよくわかっていた。「はじめに」や「おわりに」に書かねばならないことも、教えていないのに心得ていた。学生は、見ていないようで、しっかりと見ているようだ。

報告書には、「新しい奈良みいつけた」と名付けた。なぜこのテーマになったのかは、SAの古別府君が書いた「はじめに」に相当する「新しい奈良みいつけた」をご覧頂きたい。また、私が何も書かないのもさびしいので、SAの古別府君の書いた「はじめに」の前に、「ご挨拶」を書き、SAの高瀬さんが書いてくれた「おわりに」の後に一文を足した。これに伴い、高瀬さんの文章も「おわりに」というタイトルから、「SAとして見守った奈良フィールドワーク」に変更した。

今年の1年生は、大阪府や京都府出身なので、奈良はみな何度か来たことがあった。大仏殿や三月堂など、有名な場所がコースから外れているのはそのためである。東大寺の転害門など、一般の観光客があまり行かない場所も選んでくれた。また、二月堂を選んだのは拝観料が不要だったからだそうだ。拝観料はすべて金魚ミュージアムに費やした。

本当に「新しい奈良」を見つけることができたのかは、読者に判断を委ねたいと思う。もう少し掘り下げるとよい点多々ある。ただ、まだ1年生である。これから勉強してゆくなかで、現地を見る目を養ってゆきたい。また、ネットからの丸写しの部分が多いのも問題である。いくら出典を明記しても、何も新しい情報がなければ、世に出す価値はない。きちんと文献を読み、自分の眼で見て感じたことを記録する習慣を、1年生のうちから身につける指導をしなければならないと反省している。

新しい奈良みいつけた：フィールドワークの計画が決まるまで

国際観光学部 2 年 SA 古別府勢人

渡辺ゼミでは、2019 年 12 月 15 日に大学入門ゼミの一環として、奈良市内にフィールドワークへ行った。ここでは、今回のフィールドワークが奈良市内に決定した経緯と、レポートテーマとなった場所をどう選んだのかを紹介する。

当初、フィールドワークの行先案がほとんど出ず、しびれをきらした渡辺先生による強制介入も危ぶまれた。ちなみに、この時、先生は 2 つの提案をした。1 つは「奈良から桜井まで歩き続け、万葉の歌碑を英訳し、そうめんについても学ぶ、ちょっとハードな山辺の道トレッキングの旅」である。もう 1 つは、「龍田川の紅葉を愛で、法隆寺で柿を食べ、金魚についても学んでくる色彩豊かな大和路の秋の旅」である。しかし、そんなハードなフィールドワークは嫌だと、ゼミ生で各々行きたい場所を発表する機会を作った。その結果、満場一致で中西崇也くんの奈良市内の名所をめぐる「新しい奈良みいつけた」に決定した。

当初の崇也案のコースは、奈良駅から名所 1 を訪れ、カフェで昼食をとり、名所 2 と 3 へ行った後、最後に若草山で夕日を見るというものだった。名所 1, 2, 3 については、崇也君の選んだいくつかの候補があったが、どこにするかはみなで決めるというものだった。だが、移動時間の兼ね合い等で大きな変更をした。各名所とカフェ（飲食店）の場所を事前に調べ、1 枚の地図にそれぞれの所在地を記し、場所を共有した。この結果、すべてをまわるには時間が足りないことが判明した。また、どのようにして目的地へ行くかなども入念に調べ、候補地を絞った。レポートを書くため、誰がどの名所についてまとめるかも事前に決めた。私たち SA が前へ出て仕切り、多数決を行ったりもした。レポートを書くことを調べるだけでなく、興味も持たせることができるので、事前学習は効果的だったと感じる。

以下、当日の行動と実際に訪れた名所である。近鉄新大宮駅に 10 時半に集合し、徒歩で金魚ミュージアムへ向かった。次にバスと徒歩でならまちへ移動し、ならまちで各自昼食を取った。午後は、徒歩で猿沢池から興福寺を経て、徒歩で転害門に向かった。ここで、刑務所班と正倉院班に分かれ、それぞれ徒歩で東大寺二月堂へ向かった。ここで合流し、そのまま法華堂・手向山八幡宮を経由し、東大寺中門・南大門をみなで見学した。そして、最後に県庁前のスターバックスコーヒーで休憩し、18 時頃に解散した。

ゼミ生はこれらの訪れた場所とそこにあるもの（例外として昼食や鹿を含む）のテーマでレポートに取り組んだ。市内の移動はほとんど徒歩であったため、時間が足りず、もともと訪れる予定だった春日大社は惜しくも断念することとなった。当初予定していた春日大社でレポートを書くはずだったゼミ生は、急遽テーマが手向山八幡宮に変更となっ

まった。昼食もみんなで1つのお店へ行く予定だったが、予約もしていなかったため、14人が店内に入ることは厳しく、複数のグループに分かれることになった。当日だけでもたくさんの予定変更があったが、最終的にみんなのレポートが完成して良かった。



写真 1-1 正倉院前にて。撮影：渡辺和之。

金魚ミュージアム

国際観光学部 1 年 中西崇也・平田花有

1. はじめに

私達は、12 月 15 日に奈良のフィールドワークで金魚ミュージアムに訪れた。ここで私は「金魚ミュージアム」について紹介する。

2. 金魚ミュージアム

金魚ミュージアムは以前からネット等で聞いたことがあったものの訪れたことがなく、今回のフィールドワークで初めて訪れた。10 時 30 分に近鉄奈良線新大宮駅で集合した後、15 分歩いて 10 時 45 分に到着。距離は 1km ほどである。金魚ミュージアムはショッピングモールである Minara の 4 階に入っており、2018 年 4 月に奈良県初の常設型金魚ミュージアムとして開業した。

金魚ミュージアムのホームページによると、奈良県は、愛知県、熊本県と並ぶ日本三大金魚の産地として有名である。小さな金魚ミュージアムではあるものの、40 種類以上、約 1,000 匹の金魚が 7 つの部屋に渡って展示されている⁽¹⁾。展示室は数々の有名なデザイナーが設計に携わっており、さらに金魚に対する説明もあり、アートを楽しむことはもちろん金魚についても知ることもできる。入る手前の場所には天井に金魚を模した提灯が飾られていたり、金魚すくいができるスペースがあり、小さな子供が金魚すくいを楽しんでいた(中西崇也)。

入場料は大人が 1000 円、小人が 700 円で、営業時間は 10 時から 20 時まで夜遅くまで営業しているので、奈良市内を観光した帰りにでも楽しむことができる。私達は日曜の昼前に訪れたが、子供連れのお客さんが 2、3 名ほどしかおらず、少ない印象だった。

入場料を払ってまず最初の部屋にはスクリーンがあり、スクリーンに触れると変化する仕掛けが施されていたり、丸い水槽には黒い金魚や小さな金魚とたくさんの金魚が泳いでいた(写真 2-1)。なかには見たことのない金魚も泳いでいた(写真 2-2)。クリスマス直前ということもあって、ツリーに見立てた水槽も展示されていた。特にピンクのお花の壁が飾られている部屋は人気の場所でもあり、インスタ映えになるだろう。他には部屋一面が鏡に囲われている部屋やガラス張りの中に水槽のある部屋などどの部屋も綺麗だった。また、顔出しパネルもあり、写真を撮ることもできた(写真 2-3)(平田花有)。

3. まとめ

私達が訪れて気づいたことは、金魚にはたくさんの種類があったことだ。金魚といえば出目金や琉金(りゅうきん)ぐらいしか知らず、あまり種類がないと思っていた。また、金魚ミュージアムは、駅から少し離れているが、JR・近鉄奈良駅と近鉄新大宮駅から無料

シャトルバスが走っている。アクセスの点は克服しており、気軽に訪れることができる（中西崇也）。

【参考文献】

(1) <https://nara-sight.com/kingyo> 奈良祭都「金魚ミュージアム」（最終閲覧日 2020 年 1 月 15 日）



写真 2-1 タッチすると水の波紋が広がる
スクリーン。撮影：中西崇也。



写真 2-2 めずらしい金魚たち。
撮影：中西崇也。



写真 2-3 金魚と大仏と罰当たりな私たち。撮影：渡辺和之。

EVANS PLAZA でお昼ご飯

国際観光学部 1 年 岩下さくら

私たちはフィールドワークで奈良市に行った。予定では、お昼ご飯は大和カフェに行く予定だったが、予約をしていなかったため、急遽グループに分かれてお昼を食べることになった。

私たち 4 人はたまたま見つけた EVANS PLAZA という商業施設に入った。EVANS PLAZA は JR 奈良駅から徒歩 4 分、近鉄奈良駅から徒歩 8 分の場所にある。ホームページによると、2019 年の夏に出来たばかりで、店内はすごく綺麗だった。また中世ヨーロッパの王国をイメージした空間となっていて、中にはいると天平衣装体験スペースやグルメ店などがあった。グルメ店は 5、6 店舗ほどある。私たちがどこで食べるか迷っていると、お店の人が「テラス席はどこのお店の食べ物も食べれる」ということを教えてくれた。それで、テラス席でそれぞれ食べたいものを食べることにした。テラスは普段、コンサートや結婚式などのイベントで使われることがあるらしい⁽¹⁾。

私たちは、Cafe BAR MOKUBA のデミグラスオムライス、牛ハラミステーキ、SOZAI の海老クリームパスタと生ハムとモッツァレラチーズのピザを頼んだ。そして、それらを 4 人でシェアして食べた。テラス席は私たち以外人がいなくて、静かでとても過ごしやすかった。テラス席で食べたので、寒く、ご飯もすぐに冷めたが、どの食べ物も冷めてもすごく美味しかった。私たちの中ではピザとオムライスがおいしいと好評だった（写真 3-1）。

EVANS PLAZA の中には、ステーキのお店もある。今回食べなかったが、すごく美味しそうで惹かれた。EVANS PLAZA の奥にはホールもあり、よくライブが開催されているらしい。私はバンドが好きで、好きなバンドの THE ORAL CIGARETTES もそこでライブをしたらしく、サインが飾ってあって嬉しくなった。

そして、フィールドワークに行った日は、超特急の元メンバーの吉野晃一さんがライブをする日だった。一緒にご飯を食べた私たち 4 人のうちの 1 人が超特急のファンで、吉野さんが隣を通ったのに気が付き、声をかけ、少し話をさせてもらった。その子の 1 番の推しではなかったが、元メンバーということもあり、すごく嬉しそうだった。他の 3 人はその人のことは知らなかったが、有名人に会えたということで嬉しくなった。

今回ご飯を食べる予定だった大和カフェでご飯を食べられなかったのは残念だったが、新たに EVANS PLAZA を見つけることが出来た。ご飯もとても美味しく、芸能人に会えたので、大和カフェに行けなくてよかったと思った。12 月のクリスマスの時期が近く、テラス席にはクリスマスツリーが飾られていて、可愛かった。建物には骸骨がいて、少し怖い雰囲気だったが、クリスマス装飾になっていることで、怖さが和らいでいた。

参考文献

(1) TOWN MAGAZINE ぱーぷる 「【EVANS KINGDOM／奈良市】奈良に古城！？中世ヨーロッパを思わせる新スポットが奈良市三条通に NEWOPEN」

http://par-ple.jp/outing/20180702_evanskingdom/NARA（最終閲覧日：2020 年 1 月 15 日）



写真 3-1 EVANS PLAZA のご飯。撮影：岩下さくら。



写真 3-2 食後に 4 人で記念撮影した。撮影：渡辺和之。

興福寺

国際観光学部 森彩華

1. 興福寺の歴史

興福寺は、「710 年の平城遷都に伴い藤原不比等（ふじわらふひと）が創設」した¹⁾。ただし、興福寺の歴史は奈良時代よりも古い。興福寺のホームページによると、現在の興福寺は初めから興福寺という名前ではなく、山階寺（やましなでら）→厩坂寺（うまやさかでら）→興福寺と次第に改名されていった。都が近江から飛鳥に戻り、山階から厩坂に移されると、厩坂寺と改名され、平城遷都に伴い、現在の地に移転すると、興福寺と改名された²⁾。

興福寺の起源となった山階寺は、鏡王女（かがみのおおきみ）が夫の中臣鎌足（なかとみのかまたり）の病気が完治し、回復することを願って建設された。山階寺は釈迦三尊（しゃかさんぞん）、四天王などの諸仏を安置するために造営された²⁾。

興福寺は、奈良時代には四大寺（「大安寺、元興寺、薬師寺、興福寺」）³⁾、平安時代には七大寺（四大寺と「東大寺、西大寺、法隆寺」）の一つに数えられた。また、七大寺の正式名称は、南都七大寺である⁴⁾。平安時代になり、神仏習合思想が進むにつれて、藤原氏の氏寺である興福寺は、藤原氏を祀る春日大社と合体し、江戸末期まで神仏混淆の信仰形態が持続した⁵⁾。

興福寺は、何度も火災や戦災で被災している。なかでも、平安時代末期の治承4年（1180）の大火は最大規模で、平重衡（たいらのしげひら）の南都進攻で、興福寺や東大寺が炎上した。鎌倉時代になると、復興造営がおこなわれ、運慶などの仏師が活躍した。だが、その後もたびたび火災にあい、江戸時代の享保2年（1717）には、講堂・僧房・中金堂・回廊・中門・南大門・西金堂・南円堂などが焼失した⁶⁾。

明治時代に神仏分離令、廃仏毀釈(明治維新の神仏分離によって起こった仏教破壊運動で、仏教を排斥し、寺などを壊すこと)⁷⁾、社寺上地令（「神社・寺院が所有していた朱印地・除地をその境内を除いて明治4年にことごとく政府に返納したこと」）⁸⁾などで興福寺は荒れた。しかし、その後、たくさんの人々の努力で復興し、今新たな興福寺として現在その歴史を残している⁹⁾。

2. 実際に興福寺に行ってみた感想

興福寺に行く前に、ゼミ生全員で、猿沢池（さるさわのいけ）で五重塔を背景に写真を撮った（写真 4-1）。そこでは周りにたくさんのベンチが置いてあり、高齢者が多く休憩していた。興福寺に行くと、外国人が多く見られた（写真 4-2）。興福寺と猿沢池は隣同士にあるにも関わらず、興福寺では外国人が多く、猿沢池では高齢者が多く見られ、訪問者の違いを感じることができた。

興福寺は、とても歴史を感じられる場所でもある。拝観料がかかるので、私たちは見に

行かなかったが、興福寺には阿修羅像（あしゅらぞう）が展示されている。興福寺のホームページによると、阿修羅は「ペルシャなどでは大地にめぐみを与える太陽神として信仰されてきましたが、インドでは熱さを招き大地を干上がらせる太陽神として、常にインドラ(帝釈天)と戦う悪の戦闘神になります。仏教に取り入れられてからは、釈迦を守護する神と説かれるようになります」と述べられている¹⁰⁾。私たちのように外から見るだけでなく、興福寺には中に入って拝観が出来る場所もある。阿修羅像が展示されている国宝館(700円)、東金堂(300円)、中金堂(500円)と、それぞれ料金はかかるが、時間がある時はゆっくり拝観してみるのも良いと感じた(全て年中無休であり9:00~17:00まで。入館は16:30まで)¹¹⁾。興福寺にも鹿が数匹いて、大通側に出るとたくさんいるので、とても奈良を感じる事が出来た。

【参考文献】

- 1) コトバンク「興福寺」<https://kotobank.jp/word/%E8%88%88%E7%A6%8F%E5%AF%BA-63088>
(最終閲覧日：2020年2月2日)
- 2) 興福寺ホームページ「興福寺の歴史」<http://www.kohfukuji.com/> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 3) コトバンク「四大寺」<https://kotobank.jp/word/四大寺-73708> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 4) コトバンク「南都七大寺」<https://kotobank.jp/word/南都七大寺-108902> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 5) 興福寺ホームページ「興福寺の歴史」<http://www.kohfukuji.com/> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 6) 興福寺ホームページ「興福寺の歴史」<http://www.kohfukuji.com/> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 7) コトバンク「廃仏毀釈」<https://kotobank.jp/word/廃仏毀釈-113085> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 8) コトバンク「社寺土地」<https://kotobank.jp/word/社寺土地-525158> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 9) 興福寺ホームページ「興福寺の歴史」<http://www.kohfukuji.com/> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 10) 興福寺ホームページ「阿修羅像」<http://www.kohfukuji.com/property/cultural/001.html> (最終閲覧日：2020年2月2日)
- 11) 興福寺ホームページ「拝観情報」<https://www.kohfukuji.com/info/info-guide/> (最終閲覧日：2020年2月2日)



写真 4-1 猿沢の池にて。撮影：渡辺和之。



写真 4-2 興福寺南円堂。撮影：溝口千尋。

奈良のシンボル 鹿 について

国際観光学部 1 年 吉田はるか

1. はじめに

今回奈良市内でフィールドワークを行ったのだが、その道中でたくさんの鹿を見かけた。奈良に鹿を見ることを目的の一つとして来る観光客も少なくないだろう。そこで本レポートでは、奈良と鹿の関係について調べることにする。

2. 奈良と鹿との関わり

鹿といえば奈良公園にいるイメージが強いが、なぜ奈良公園には鹿がたくさんいるのだろうか。奈良市観光協会のホームページによると、「奈良公園の一部は春日大社の境内なのだが、春日大社の祭神、武甕槌命（タケミカヅチノミコト）は茨城県の鹿島神社から神鹿に乗ってやってきたという言い伝えがあるため、鹿は神の使いとして古くから手厚く保護されてきた」のだそうだ¹⁾。天然記念物でもある奈良の鹿は、鹿愛護会によって調査・保護されており、鹿と人が共存するための地域社会づくりの推進などの活動を通して、観光客と鹿のトラブルを未然に防ぐ対策などがとられている²⁾。

その一つに「鹿苑（ろくえん）」というところがある。鹿苑とは春日大社の石燈籠の並ぶ参道の南側に位置する鹿の保護施設だ。妊娠している鹿や、子連れのお母さん鹿をそのまま公園内に放置すると、観光客らに危害を加えたり、観光客らが子鹿に触って人間の匂いに移したり、子鹿を追い掛け回したりすることで、お母さん鹿が育児を放棄してしまう可能性がある。そこでそれらを防ぐための施設として 1929 年に一般財団法人奈良の鹿愛護会によって鹿苑が建設された³⁾。毎年 4 月から妊娠しているお母さん鹿を保護し(約 200 頭)、赤ちゃん鹿がお母さん鹿と一緒に行動できるようになる 7 月中旬までの期間中に、特別イベント「子鹿公開」を開催し、可愛らしい子鹿を公開している⁴⁾。

3. 鹿にまつわる行事

奈良では一年を通して鹿にまつわる行事がいくつかある。鹿寄せというホルンの音色で鹿を呼び寄せる古都奈良の風物詩や、江戸時代から伝わる危険防止と樹木の保護のために行われる角きり（10 月）が有名だろう。また、鹿まつり（11 月）といって過去 1 年間に死亡した鹿たちの霊を慰める慰霊祭も行われている⁵⁾。

4. フィールドワークを行って

奈良で実際に鹿を見ると、本当に可愛くて、思わず写真を撮りたくなった（写真 5-1）。そして、観光客が鹿の写真を撮ったり、鹿せんべいを与えている光景がよく見られた。なかでも印象的だったのは、鹿のお辞儀である。観光客が鹿に向かってお辞儀をすると、鹿

もお辞儀をし返すのだ。それが見たくて、何度も鹿にお辞儀をしている観光客もいた。また、鹿せんべいを持っていると鹿が追いかけてくるので、小さい子どもが怖がって逃げたりする場面もうかがえた。

5. まとめ

今回本レポートを書くにあたって鹿について調べてみて、奈良にとって鹿がどのような存在で、いかに大切にされているかがわかった。今後も観光客が増え続けるであろう奈良で、鹿が生活しにくくならないよう、鹿についての知識を広めることで、それぞれが少しでも鹿についての理解することが重要になってくるのではないかと考える。また鹿の健康に害が及ばないよう、ゴミの管理などはいつも以上に注意するべきであると感じた。

【参考文献】

- 1) 奈良市観光協会サイト「奈良の鹿 4つの豆知識」
<https://narashikanko.or.jp/feature/deer/> （最終閲覧日：2019年12月22日）
- 2) 一般財団法人奈良の鹿愛護会「活動内容」
<https://naradeer.com/about/activity.html> （最終閲覧日：2019年12月22日）
- 3) 一般財団法人奈良の鹿愛護会「活動内容」
<https://naradeer.com/about/activity.html> （最終閲覧日：2019年12月22日）
- 4) 奈良市観光協会サイト「奈良の鹿 4つの豆知識」
<https://narashikanko.or.jp/feature/deer/> （最終閲覧日：2019年12月22日）
- 5) 奈良市観光協会サイト「奈良の鹿 4つの豆知識」
<https://narashikanko.or.jp/feature/deer/> （最終閲覧日：2019年12月22日）



写真 5-1 角を切った鹿
撮影：吉田はるか。



写真 5-2 鹿はドングリを食べた。
撮影：溝口千尋。

転害門

国際観光学部 1 年 高田栞里

1. はじめに

今回、私たちは奈良でのフィールドワークで転害門（てがいもん）を訪れた（写真 6-1）。本レポートでは転害門の歴史や表記について事前に調べたことと、実際に行ってみて知ることができたこと・気づいたことをまとめる。

2. 転害門とは

華嚴宗大本山（けごんしゅうだいほんざん）東大寺公式ホームページによると、転害門は境内の西北、正倉院西側にあり、三間一戸八脚門（さんけんいつこはつきやくもん）の形式を持つ堂々とした門である。1180 年の平重衡（たいらのしげひら）の兵火、1567 年の三好・松永の戦いの 2 回の戦火においても致命的なダメージは受けず、焼け残った寺内では数少ない建物のひとつで、天平時代の東大寺の伽藍（がらん）建築を想像できる唯一の遺構となっている。鎌倉時代の修理で改変されてはいるが、基本的には奈良時代の建物である。国宝建造部にも指定されている⁽¹⁾。

3. 転害門の表記と転害会

「転害門」は、「てがいもん」と読む。奈良まちあるき風景紀行というサイトによると、その表記は他にもいくつかあり、「転害門」のほか「碾磴門」「手搔門」「手貝門」と表記されることもある。由来としては、吉祥の位置（大仏殿の西北）にあり害を転ずる意から「転害門」、付近に美しい碾磴（てんがい＝石臼）があったから「碾磴門」、この門で行基（ぎょうき）が菩提僊那（ぼだいせんな）を手招きする様子が手で物を搔くようだったから「手搔門」、などの言い伝えがある。ちなみに、転害門前のバス停の表記は「手貝門」である⁽²⁾。毎年 10 月には、手向山八幡宮で転害門を御旅所とする祭礼「転害会（てがいえ）」が行われる⁽³⁾。

4. 転害門を訪れて

転害門を訪れると、奈良市観光協会の方々がいらっしゃって、話を伺うことができた。

転害門は 1300 年前に建てられ、事前に調べていたとおり、東大寺西側に建てられた 3 つの門のうち 2 度の火事にも耐え焼け残った唯一の門だった⁽⁴⁾。なんと正面から見て一番右の柱は当時のままだそう。1300 年もの年月を経ても門を支え続けている木が存在することに感銘を受けた（写真 6-2）。1180 年には源頼朝が復興・修理を行ったが、その柱はそのまま残された。門の中心には 4 つの丸い石があり、そこには昔お神輿（みこし）が置かれていたことがわかった。また、事前に調べた転害門の表記以外にも、「佐保路門（さほじもん）」、

「景清門（かげきよもん）」と呼ばれるということもわかった。佐保路門というのは、この門が都の西側を通る佐保路に面していたからである。景清門というのは、源平の戦いの後、平家の武将の悪七兵衛景清（あくしちびょうえかげきよ）が、平家滅亡後、再建された東大寺の大仏開眼式に参列する源頼朝を暗殺するために、この門に隠れていたという言い伝えがあるからである。

奈良市観光協会の方は大仏殿の話も同時に教えてくださった。大仏殿の大仏はお金に余裕が無い時代、ずっと雨に打たれっぱなしで色が変わってしまうなど、汚れが目立ってしまっていた。しかし 300 年前についに頭が復興されたそう。汚れない工夫もされている。今回大仏は見るができなかったため、また改めて見に行きたい。

5. まとめ

転害門はたくさんの表記があり、その分、歴史が詰まっているのだなと感じた。1300 年前の柱はほかの柱よりも年輪が多く、年季が入っていたが、全然弱々しくなく、しっかりと門を支えていた。

また、奈良市観光協会の方々も、奈良の町のガイドも行っているそう。多くの外国人も楽しめるように、英語のみならず、中国語・韓国語のガイドも行っている。1 人 100 円というとてもお手頃な価格なため、たくさんの方に知ってもらい、参加する方が増えるといいなと感じた。そうすれば、きっと奈良の魅力にたくさん触れることができるはずだ。

【参考文献】

(1)華嚴宗大本山 東大寺公式ホームページ「転害門」

<http://www.todaiji.or.jp/contents/guidance/guidance9.html>（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）

(2)奈良まちあるき風景紀行「東大寺転害門：大変貴重な奈良時代の建築は「きたまち」のシンボリック的存在」

<https://narakanko-enjoy.com/?p=6871>（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）

(3)登大路ホテル奈良「東大寺 転害門」 <https://noborioji.com/noboriojiselect/article/84>

（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）

(4)あるく奈良「静寂に包まれた大仏殿の北側」

<http://www.pref.nara.jp/miryoku/aruku/masumasu/todaiji/t02/>（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）



写真 6-1 転害門。撮影：高田栞里。



写真 6-2 1300 年前の柱。撮影：高田栞里。

転害門について

国際観光学部 1 年 木下結斐

私たちは転害門（てがいもん）に行った。転害門は、東大寺境内西北にある正倉院の西側にある。一重の門に本柱四本の前後にそれぞれ「控え柱」と呼ばれる柱が合わせて八本ある「三間一戸八脚門(さんまいっとはっきゃくもん)」の形式をもつ堂々とした門である。この形式は、転害門の他に大寺院や宮城の門にも用いられているなどの他にも、転害門が建てられた時期、建築様式、平城京の時代に呼ばれていた別称など、左端にある看板に転害門の説明が書いてあるので、詳しく知ることができた。

転害門の端に観光案内所がある。その中に入ってみると、東大寺周辺の観光スポットの写真や、東大寺を中心とした街の地図などが飾ってある。なかにいた男性に尋ねてみると、この案内所では地元の方たちが主に外国人観光客向けに転害門や東大寺のボランティアガイドをしているらしく、英語、中国語、韓国語の 3 カ国語は、ほとんど話せるそうだ。その方の話によると、転害門がある一帯は 1180 年の治承（じしょう）の兵火と 1567 年の永禄（えいろく）の兵火でほとんど焼けてしまったそうだ。転害門は、奇跡的に焼け残った寺内でも数少ない天平時代(719～784 年)を想像できる唯一の遺構である。鎌倉時代の修理で改変されている部分もある。しかし、写真 6-2 の柱は、建てられた当時のままであり、約 1300 年前のものである。そのため、少し変色していたり、削られている部分もあったが、真っ直ぐに建っていて、とてもそのようには見えなかった。

また、門の通り道に 4 つ丸い石が布かれている。この石は、毎年 10 月に行われる「転害会(てがいえ)」と呼ばれる祭りの際、手向山八幡宮から担いできた神輿（みこし）を置くためのものだとして教えてもらった（写真 7-1）。転害会は、奈良時代に九州の宇佐八幡宮から神様を奈良に招いた時に、この門で神輿を迎える神事をしたことに由来する。今でも手向山八幡境内で神事を行った後に、正倉院の西側を通過して、転害門まで神輿が運ばれてくる。明治に廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）が行われ、神道と仏教が分離された後でも、まだ、寺と神社の関係が続いているのは、とても素晴らしいことだと私は思った。

私は、小学生の頃から何度か東大寺や正倉院に行ったことはあった。転害門は行ったことが無かったので、全く知らなかった。しかし、今回訪れて 1300 年前の建物が少々改築はされたものの、そのまま残っている部分もあり、凄い歴史があることを知った。改めて奈良の素晴らしさを感じることができた。



写真 7-1 御神輿が置かれていた石。撮影：渡辺和之。

旧奈良監獄について

国際観光学部 1 年 清水琴音

1. はじめに

私は、好きなジャニーズ Jr. というアイドルが出演する映画「少年たち」で、この旧奈良監獄について知った。ほとんどすべての場面でこの旧奈良監獄が使用されている。私は映画の撮影場所で本当の刑務所を使っていると知って、とても驚いた記憶がある。そこは、刑務所とは思えないほど綺麗な建物であったからだ。

昨年 12 月、私たちはフィールドワークとして奈良を訪れた。その時、すぐ近くに旧奈良監獄があることを知り、同じアイドルを好きな SA の里佳子さんと見に行くことができた(写真 8-1)。本レポートでは、フィールドワークから帰って旧奈良監獄について調べたことをまとめる。

2. 旧奈良監獄の歴史とこれから

私たちが訪れた旧奈良監獄は、奈良の観光名所である東大寺から北へ 10 分ほどの距離にある。長い坂道を上った先にある旧奈良監獄の周りは閑静な住宅街になっており、コスモスで有名な般若寺がすぐ近くにあるという奈良らしい立地になっている。公式ホームページによると、旧奈良監獄は、明治政府が千葉・奈良・金沢・鹿児島・長崎に設置した明治五大監獄の一つとして 1909 年(明治 42 年)に開設した日本最古の刑務所である。2017 年(平成 29 年)に耐震性の問題など老朽化が原因で閉鎖され、同年、その歴史的価値から重要文化財に指定された。全て旧奈良監獄のように美しい建物の明治五大監獄であるが、旧奈良監獄はそのなかで唯一監獄としての全貌を残す建物である。今後は、星野リゾートのプリズンホテルとして生まれ変わる予定だ⁽¹⁾。

3. 旧奈良監獄の特徴と構造

旧奈良監獄の最大の特徴は、監獄とは思えない豪勢な見た目の赤レンガを使った赤レンガ建築である。公式ホームページによると、ほとんどの監獄が木造建築であった明治初期、監獄では受刑者による放火が多発していた。さらに、放火に伴う逃亡者も多数出ていた。それを防ぐため、日本で赤レンガが大量生産できるようになったタイミングで採用されたのが赤レンガ建築である。監獄の中身は見た目に反し、普通の監獄となっている。監獄の中の中央監視所には、ハビランド・システムが採用されており、見張り台を中心とし放射状に収容棟を並べることで、中央監視所から 5 つの収容棟が一望できるようになっている。他にも、重屏禁房という監獄内の規律や秩序に違反する行為をした受刑者を閉じ込める房もある⁽²⁾。

4. 実際訪れてみて

私たちが、旧奈良監獄を訪れた際にも、私たちと同じようにこの監獄の事を知ったのであろう中学生ぐらいのグループがいた。今回、私達が訪れたときは監獄の内部の見学はできなかった。私が外から見る限り、旧奈良監獄は華やかな建物にしか見えない。だが、映画や You Tube で出演者たちがしていた解説のなかには、一般の監獄や懲罰房に入っていた人たちが壁面にメッセージを刻んだシーンが出てくる。それを想うと、監獄の中はどれほど辛かったのか、受刑者の気持ちが伝わってくる気がした。また、監獄の歴史を調べることで、一望監視体制の下で、逃げられない構造であることがわかり、華やいで見えた建物が威圧的な建物に見えてきた。

実際、自分の目で見て、歴史を知った今、その部分をふまえて映画をもう一度見てみたいと感じた。この貴重な建物がホテルになることも楽しみだ。最近はお城のホテルなども人気を集めている。このホテルは奈良の新しい名所になるはずだ。完成したら是非私も訪れたい。

参考文献

- (1) 旧奈良監獄「歴史」 former-nara-prison.com/history/ 最終閲覧日：2020年3月24日)
- (2) 旧奈良監獄「建物」 former-nara-prison.com/architecture/ (最終閲覧日：2020年3月24日)



写真 8-1 旧奈良監獄 正面。撮影：清水琴音。

東大寺二月堂

国際観光学部 1 年 北條 百花・樽見勇輝

私達はフィールドワークで奈良を散策した。その時に行った東大寺の二月堂について説明したい。

旧暦 2 月に「お水取り」が行われることからこの名がついた。二月堂は良弁僧正の高弟実忠和尚の草創と伝わるが、平重衡（たいらのしげひら）の兵火（1180 年）、三好・松永の戦い（1567 年）の 2 回の戦火には焼け残った。だが、寛文 7 年（1667 年）のお水取りの最中に失火で焼失し、2 年後に再建されたのが現在の建物だ。本尊は大観音（おおかんのん）、小観音（こがんのん）と呼ばれる 2 体の十一面観音像で、どちらも何人も見ることを許されない絶対秘仏だ⁽¹⁾。建物は 2005 年 12 月、国宝に指定された。古都に春を呼ぶ「お水取り」の名で知られる修二会は、このお堂で旧暦の 2 月に行われたことから、二月堂という呼び名がおこった⁽²⁾。

私たちは転害門（てがいもん）から歩いて、二月堂へ向かった。途中、森のなかに所々草が生えていて、そこに鹿がいた。大仏殿の北側には、観光客もほとんどおらず、静かだった（写真 9-1）。20 分位あるくと、二月堂の下に出た（写真 9-2）。階段が多くて、お堂に登るまでに体力を使った。だけど、景色が絶景で、奈良市内が一望できて、素敵だった（写真 9-3）。お堂の上で団子を売っている店があった。食べたかったけど、高かったので、買わなかった。紅葉がとても綺麗だった（写真 9-4）。

参考文献

(1)華嚴宗大本山「東大寺の歴史」<http://www.todaiji.or.jp/contents/history/index.html>（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）

(2)なら旅ネット<奈良県観光公式サイト>「東大寺二月堂」

http://yamatoji.nara-kankou.or.jp/01shaji/02tera/01north_area/todaijinigatsudo/（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）



写真 9-1 東大寺大仏殿。北側は観光客もおらず、静寂な風景を楽しめる。撮影：渡辺和之。



写真 9-2 東大寺二月堂。撮影：渡辺和之。



写真 9-3 二月堂から見た奈良市内。撮影：溝口千尋。



写真 9-4 奈良公園の紅葉。撮影：渡辺和之。

手向山八幡宮

国際観光学部 1 年 鍵俊生

手向山八幡宮（たむけやまはちまんぐう）は紅葉の名所手向山の山麓にあり、天平勝宝元年（749）東大寺の大仏建立のため、九州豊前国（大分県）宇佐八幡宮より東大寺守護の神としてむかえ、まつられた。拝観料は無料となっている⁽¹⁾。

実際に訪れてみて、結構高い所に位置していたので、景色は良かった。だが、紅葉のシーズンが終わりかけていたのが、残念だった。「奈良県は寒い」ということもあり、まだ少し紅葉が残っていてよかった。

参考文献

(1)奈良市観光協会サイト「手向山八幡宮」

<https://narashikanko.or.jp/spot/shrine/tamukeyama-hachimangu/>（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）



写真 10-1 手向山八幡宮。撮影：渡辺和之。

東大寺・南大門について

国際観光学部 1 年 溝口千尋

奈良フィールドワークにて東大寺・南大門に行った（写真 11-1）。まず下調べとして、東大寺の公式ホームページで東大寺と南大門について調べた。

東大寺は、国家の災害・困難などを消除することを説く「金光明最勝王經」の具現が国分寺の建立となった。さらに発展して、世界に存在するあらゆるものは、それぞれ密接な相関関係の上に成り立ち平和で秩序ある世界を形成していると説いている「華嚴經(けごんきょう)」の教理の実現が、東大寺の創建につながっていた。東大寺の正式名称は、「金光明四天王護国寺(きんこうみょうしてんのうごこくじ)」と言われている⁽¹⁾。

私たちは、法華堂(三月堂)前を歩いた。法華堂は東大寺の中でも最も古い建築とされていて、旧暦 3 月に法華会(ほっけえ)が行われるようになり法華堂、また三月堂とも呼ばれるようになった。外観は、時代の異なる建築が高い技術によって造られており、綺麗だなと感じた。

Wikipedia によると、南大門は天平創建時に一度、平安時代に大風で倒壊している。現在私たちが目にしている南大門は鎌倉時代、東大寺を復興した重源上人(ちようげんしょうにん)が再建したもので、今はない鎌倉再建の大仏殿の威容を偲ばせる貴重な遺構である。建仁 3 年(1203 年)には門内に安置する仁王像を竣工した。南大門には、仁王像が向かい合うように竣工されており、向かって左側に阿形像（写真 11-2）、右側に吽形像（写真 11-3）が安置されている。仁王像は、鎌倉時代の仏師である運慶が指揮を取り、快慶らとともに彫り上げ、わずか 69 日間の製作期間で造られた⁽²⁾。

生で見たとき、人の何倍もの大きさがあり、とても迫力があつた。仁王像の前には外国人や他の都道府県の観光客が多くいて大半の人がカメラを向けていた。

【参考文献】

(1)華嚴宗大本山東大寺 www.todaiji.or.jp（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）

(2)Wikipedia「東大寺」<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/東大寺>（最終閲覧日：2020 年 2 月 2 日）



写真 11-1 東大寺南大門。撮影：渡辺和之。



写真 11-2 東大寺南大門の仁王像（阿形像）
撮影：渡辺和之。



写真 11-3 東大寺南大門仁王像（吽形像）
撮影：渡辺和之。

SA として見守った奈良フィールドワーク

国際観光学部 2 年 SA 高瀬里佳子

12 月 15 日に奈良で後期のフィールドワークを行った。今回は全員で同じ場所をまわることになった。10 時半に近鉄新大宮駅に集合することになっており、全員遅刻することなく集まったため、快調なスタートとなった。

最初は金魚ミュージアムに向かった。スマホで目的地を調べ、協力しながら向かっていた。歩行者や自転車等の周囲にも気を付けながら移動できていた。金魚ミュージアムはショッピングモールの 4 階にあった。てっきり独立した建物だと思っていたため、驚いた。なかに入ってみると、カラフルな照明や、お花、ビーズ等で飾りつけされた水槽の中に、様々な種類の金魚が泳いでいた。すごく映える写真が撮れるスポットばかりだったため、全員写真撮影に夢中だった。金魚以外にも、ソファや風船、顔出しパネルも設置されていたため、みんなで仲良く写真を撮りあっていた。前期より格段に仲良くなっていたため、見ていてとても微笑ましかった。

次はお昼ご飯を食べに、大和カフェを訪れたが、大人数かつお昼時であったため、席がなく、4 班に分かれて食べることにした。

昼食を取り、猿沢池、興福寺へ向かった。坂道が多く、移動が少ししんどかった。しかし、みんなの話は尽きることなく、楽しそうに移動していた。近くでお祭りが行われていたため、とても人が多かった。一回はぐれそうになったが、猿沢池付近で合流することができ、安心した。奈良市役所の前には、鹿が沢山いて、写真を撮ったり触れ合ったりと、とても楽しそうだった。

転害門までの道のりが思ったより長く、みんなに疲れが見えはじめた。少しペースが落ちかけていたが、なんとかたどり着くことができた。現地の案内人さんに話を聞いたり、観光案内所で話を聞いたり、手分けをしていろんな人から話を聞いていてよかった（写真 12-1）。

近くに奈良少年刑務所があるという情報を得て、せっかくなので行ってみた。私の好きな映画の撮影地ということもあり、行くことができて嬉しかった。私たちの他にも、大勢で写真を撮っている人がいた。その人達も映画の話をしていたため、聖地巡礼で訪れる人も少なくないのではないかと思った。

二月堂では、奈良のまちを一望できた。とても景色が綺麗であったため、紅葉の季節に来たらもっと良い景色が見ることができると思った。

最後に南大門を抜け、近くのスターバックスで休憩し、帰宅した。

今回は、1 回生終盤のゼミということもあり、前期と比べてかなり仲良くなっていた。私も、みんなと前期より仲良くなることができたため、嬉しかった。個人的には、初めての

奈良だったため、すべてが新鮮であったし、ちょっとした聖地巡礼もできて、とても充実した一日になった。

1年間SAを通して、普段の大学生活では経験できないことをさせてもらえて、とてもためになった。後輩と関わる機会ができて、とても嬉しかった。これからもそのつながりを大切にしていきたいと思う。



写真 12-1 転害門でボランティアの方にお話を伺いました。撮影：渡辺和之。

奈良は地味な街なのか？

国際観光学部教員 渡辺和之

2019年の秋は奈良づくしだった。9月と10月には橿原市の仕事をし、11と12月には奈良マラソンのコースを走った。実に2週間に1度、奈良県を訪れていた。奈良は南大阪からは近く、見るべきものも多くある。仏像も、寺も、山辺の道もある。にもかかわらず、学生たちは「奈良は地味だ」という。京都にはきらびやかなイメージを抱くのには、奈良には抱かない。

おそらく、それは、奈良にモノトーンのイメージがあるからなのだろう。奈良は平安時代の終わりに南都焼討にあい、平家の平重衡（たいらのしげひら）に焼かれてしまった。東大寺をはじめ、その後多くの寺院は鎌倉時代に再現された。鎌倉時代は質実剛健を良しとする武士の時代である。寺院の多くは素材そのものの色となり、木や瓦や白壁など、茶や黒や白の色彩に変わった。でも、それ以前の奈良はもっと色彩豊かな街だったのである。

奈良の枕詞に「あおによし」がある。昔、私が高校で古文を習った時には、「あおによし」は奈良の枕詞だから訳さなくてよいと教わった。だが、「あおによし」は奈良をあらわす大事な修飾語である。青丹というのは、緑色の染料である。その緑を真つ赤な朱色の上に塗りたくるのである。古代に奈良の街を作った人たちは、鎌倉武士のような質実剛健を愛する人たちではなかった。当時最先端のモードだった大陸の息吹を感じさせる赤と緑の極彩色に彩られた華美な街。そんな派手な色彩が「匂うがごとく」むんむんと充満している街。それが古代の奈良なのである。

どでかいものを作りたがるのも、大陸の真似事なのだろう。中国の都市はとにかく広い。わざと大きな街を作って、地方から来た人を威圧しようとしているのではないかと思うくらい、現在の北京の街は広い。無論、唐の長安は現在の北京よりはずっと小さな街である。だが、それでも当時の日本人の度肝を抜くくらい広かったのだろう。実際に、中国の首都には、今も昔も地方からたくさんの人が集まる。だから、物理的に広いスペースを必要としていたのだろう。その街から専門家を呼ぶのだから、長安に劣らぬ街を作らねばならないと、当時の日本人が気負うのもわからなくはない。おそらく古代の権力者たちは、巨大な大仏のある寺院を、都を訪れた人々に見せびらかしたかったのだろう。奈良は、東アジアの文明を志向した日本人のコンプレックスが生み出した巨大な街なのかもしれない。

その副産物として、現在の奈良の街は高台の上にある。平城京の大極殿のある西ノ京から東大寺や春日大社のある市街地の方へ歩いてみるとよくわかる。どんどんと坂を上ったどんづまり。若草山のかなり中腹に近い場所に東大寺はある。だから、その最奥にある二月堂は眺めがよい。奈良市内を一望のもとに眺めることができる。

秋の奈良は美しい。奈良公園の木々は赤や黄色に染まり、青空に映える。郊外に出ると、田んぼの脇にある家の庭には柿の木が赤く色づいている。法隆寺の鐘がなれば絵になるよ

うな風景がどこにでもある。山辺の道は山と平地の山際をゆくので、眺めも良い。途中、森を抜け、田んぼの脇を通る。峠を越えるとすばらしい景色に恵まれるが、アップダウンはかなりある。歩くなら、ハイキングする位の覚悟が必要である。

この数十年で、奈良は色彩豊かな街になった。大極殿や朱雀門が再建されたり、興福寺の中金堂が天平時代の様式で復元されたりと、私が修学旅行で奈良を訪れた時にはなかった建物ができた。極彩色の復権である。たしかに〇〇史跡と看板だけあるよりは、観光客にもわかりやすいのだろう。だが、奈良を訪れたら、国宝になっている建物をよく見て欲しい。東大寺の転害門のような平重衡の戦火を免れた建物も、茶色や黒や白のモノトーン、もしくはそれらの色を組み合わせたツートンカラーの色彩をしている。でも、近寄ってよく見ると、朱や青丹がはげた色が所々にうっすらと残っている。こういうかすかな痕跡があるのが、歴史的に古い建物なのである。

近年、奈良はおしゃれな街になりつつある。学生たちにスマホで行きたい所を調べさせると、ならまちのカフェや金魚ミュージアムや県庁前のスタバなど、インスタ映えする所をたくさん見つける。そういう写真を見ると、「奈良にもこんなおしゃれな所があるんだ」と、学生は驚く。でも、よく考えて欲しい。そうしたカラフルな新しい施設ができた背景には、大阪の人に「地味」と言われて対抗する、奈良の人の意地がきつとあるのだろう。

奈良に華美なものを求めすぎるのも、どうかと思う。仏像は、金箔が施され、きらびやかだからありがたいのではない。仏像は、人々の願いを一心に集める仏様の魂が宿るからこそありがたいのであり、当時の仏師たちが心を込めて仏像を彫ったからこそ美しいのである。奈良時代の僧侶や仏師には、仏像に美を求めることよりも、聖なる仏像をあらゆる様式に忠実なことが重要だったのだろう。また、東大寺の南大門にある運慶・快慶の仁王像もモノトーンである。この仁王像は、日本人が大陸のくびきから解かれ、独自の仏像様式を創りあげた鎌倉時代の最高傑作である。ただし、この仁王像にも過去には彩色が施されていた時代もあったようである。

これから観光を学ぶ人たちには、奈良には華美な時代があったこと、現存する奈良の文化財の多くが質実剛健で実を取る鎌倉時代以降の作品であることを、どうか忘れないで欲しい。奈良は決して地味な街ではない。また、奈良が華美な街でなくなった背景には、奈良の人々が選択した歴史がある。また、一見すると奈良が「地味」に見えるのは、奈良の人たちが身の丈に合った生き方をしようと決意したからであり、物理的な制約があるなかで、他の街には負けない新しいものを創りあげたからなのであろう。

+++++
渡辺和之（編）『2019 年度後期大学入門ゼミ 報告書：新しい奈良みつけた』阪南大学国際観光学部渡辺研究室 2020 年 3 月 31 日発行

〒580-0033 大阪府松原市天美南 1-108-1 阪南大学国際観光学部

電話：072-332-1224 メール：watanabe@hannan-u.ac.jp URL <https://www.hannan-u.ac.jp/>

+++++